〔書　評〕

蜂谷清人著

『狂言の国語史的研究――流動の諸相――』

坂口　至

一

本書は，狂言のことばの研究を領導し続けてきた著者の，前著『狂言台本の国語学的研究』（昭52，笠間書院）に続く第二論文集であり，次のような内容になっている。

序章　狂言のことばの流動に関する研究の視点と課題――付，狂言台本の一覧と解題――
第一章　大蔵虎明における狂言の言語観と台本の整備をめぐる問題
第二章　鷺保教と“狂言ことば”――「芸稽古伝」の記述をめぐって――
第三章　狂言名ノリの文末指定表現「である」の一類の使い分けとその流動
第四章　狂言における助動詞「です」の用法と流動――語感と使用者をめぐる問題――
第五章　狂言の命令表現「一(さ)しめ」「一(さ)い」「一(さ)しませ」をめぐって――流派による用語の分化のプロセス――
第六章　狂言における“食ウ”“飲ム”の意味のことばの流動とその国語史的意味
第七章　狂言台本に見る動詞の活用の特徴をめぐって
第八章　室町末期芸能資料に見るハ行四段動詞連用形の音便――狂言・説経・幸若舞を中心に――
第九章　狂言における“妻”の呼称の流動――尊敬の表現を中心に――
第十章　狂言の若い女性に関する呼称「おごう」「おなあ」をめぐって
第十一章　狂言の形容詞「わわしい」と「かしましい」――「わわしい女」の表現の成立――
第十二章　狂言と忌みことば・祝いことば――鷺保教本の場合――
第十三章　狂言の笑いの技法としての秀句
まとめ――付，初出誌その他――

このうち，序章，第一章，第四章～第六章，第十章が書き下ろしであり，その他の章が，既発表のもの，またはそれを補訂したものである。

これらの章は，表題でも明らかなように，研究の資料と方法論に関するものから，文法，語彙，表現に関するものまで多岐にわたっているが，中でも記述の中心となっているのは，文末の表現に関する第三章～第五章と，語彙・語誌に関する第六章，第九章～第十一章である。その第三章～第五章も，文末の表現にどのような語彙が用いられるかという考察が中心になっており，その意味では第六章，第九章～第十一章と共通の問題意

識に立っているとも言える。本書の性格を特徴づけるものは，まさに語彙の研究と言えるであろう。各章の要点は，巻末の「まとめ――付，初出誌その他――」において，著者自ら簡潔に述べているので，あるいは蛇足かもしれないが，書評の順序として，評者なりに要約しながらコメントを加えて行きたい。

二

序章はまず，狂言台本の成立とその後の展開について略述し，これらの台本を対象とする研究の視点について述べる。著者によれば，前著では，『天正狂言本』や『虎明本』『天理本』といった近世初期までの狂言台本のことばを整理，考察した論文が多かったが，本書の大部分の論文は「それらの理解をもとにさらにその後の狂言諸台本における流動の事実を把え，その流動の理由について，国語史の流れや狂言師の狂言に対する意識などと関係づけながら究明しよう」(5頁)という意図の下に書かれたものである。そして，本書の表題の中にある「国語史的研究」ということばには，「狂言内部のことばに関する詳しい考察が，国語史，特に室町時代・江戸時代を中心とする国語史の理解と認識に重要な役割を果たす」(9頁)という意味合いが含まれているという。「国語史的研究」ということばは，研究者によって様々に解釈可能なことばであり，評者は「その資料のことばによって国語史そのものの主要部分または一部分を記述する」という，より積極的な意味合いも付与可能だと思うが，本書の著者の立場は，上記の姿勢で一貫しており，本書を評するにあたっても，著者の立場に沿った形でなされなければならないであろう。なお，本章末尾に「狂言台本の一覧と解題」があるが，ここに近年発見された『祝本狂言集』も付け加えて欲しかった。該本は，天正狂言本と天理本や虎明本の中間に位置する古い狂言本(流派は不明)と考えられており(永井猛「『祝本狂言集』――翻刻と解説――」(『能楽研究』12，昭62))，ことばの資料としても相当な価値を持つものと思われるのである。名のみ事々しく，台本の解説には必ず登場しながら，実際には容易に見ることのできない和泉流の『波形本』や『雲形本』よりも，手近に見られる本の活用が大事だと思う。

第一章は，まず大蔵虎明の狂言ことばに対する言語意識を，その著『わらんべ草』の記述を分析することで解明しようとする。具体的には，「大和詞」「世話に云付たること葉」「国きやうだん(郷談)」「かたこと」などのキーワードの意味するところを，和歌や俳諧，当時の辞書などにおける用例をもとに探って行く。多様な資料を参照しつつ，緻密な論を展開する手際は実に鮮やかである。次いで，同時期に書写された『虎明本』と『虎清本』を文法や表記の面から比較し，虎明が，次期に標準的位置を占めるようになることばを積極的に採用する一方，古びたことばを捨て去っていること，『虎清本』に見られる表音的な表記や，「まっする」のような過渡的な語形については排除する傾向にあることなどを明らかにする。

第二章は，鷺流の古台本である『鷺保教本』(享保年間頃写)に記載された「芸稽古伝」

の中の「狂言計(バカリ)ニ用ル言葉」，具体的には「ス(候)」「ヲリャレ」「ヅル(出)」「見ウ」「ヲセ(仰)」などのことばを紹介し，それらの用法や保教の意図などについて，該本の用例を検討しつつ，国語史的背景をからめながら論じている。中で「見ウ」の発音については議論のあるところであるが，「ミョウ」であったろうとする著者の結論は穏当なものだと思う。また，狂言の流派によって使用される用語に違いがあるという記述にも注目し，「(サ)シマセ」と「(サ)シメ」に関して，前者が鷺流，後者が大蔵流の用語と捉えられていること，返答の際に用いる「デ御座ル」という特殊なことばが鷺流で用いられていることなどを指摘する。このうち，「デ御座ル」についての考察は，通常の文中・文末での丁寧語の用法と捉えた初出論文を読んだ際に，唯一不審に思った部分であるが，本書に収めるにあたり，鈴木浩・渡部圭介「鷺流狂言『延宝・忠政本』の国語史資料としての位置づけ」(『日本近代語研究』1，平3)という論文での指摘を受けて，単独で感動詞のように用いられる用法を補っており，その柔軟な姿勢に敬意を表するものである。ただし，この「デ御座ル」は，鈴木・渡部氏が言うように，単独の感動詞(応答詞と言うべきか)そのものと考えるべきで，通常の丁寧語として説明を加えた部分は削除すべきであろう。また，この文句の意味も，「相手のことばを肯定的に受け止めた返事の場合の表現」(「なかなか」などと同類)というより，相手のことばを受けて，それを一旦確認するようなニュアンスを含むことばのように感じられる。なお，この「デ御座ル」は，鷺流の諸本に特有の用語のようであるが，前述の『祝本狂言集』にも，「〈察化〉いや，それがしハそちがたのふだ物のおぢである。〈冠者〉で御座る。〈察化〉此ひろいらく中でそのまゝそれがしにあふてあるハくわほうなものではないか。」(「さツくわ」)という例があり，注意をひく。この用例の意味も，上に述べたように取って不都合はないと思われる(少なくとも「なかなか」などの意味では通じにくい)。

第三章は，狂言の名乗りの最後に見られる文末指定表現について論ずる。本章は前著の第三章の記述を増補したものであり，前著の『虎明本』対象から，大蔵・和泉・鷺の各流派の初期から後期までの台本に考察の範囲を広げて，近世狂言の文末指定表現の全体像を明らかにすることに成功している。具体的には，前期の台本では，「(にて)ある」や「じゃ」のような観客に対する敬意を含まない指定表現も使用されるが，後期の台本では「じゃ」は姿を消し，丁寧語を専ら用いるようになること，「おりゃる」「おぢゃる」は文末の指定表現としては頻用されるが，名乗りの場面では定着しなかったこと，初期の台本で多く用いられていた「(にて)候ふ」が次第に減少し，「ござる」に取って替わられることなどが明らかにされる。

第四章は，前章で取り上げた文末指定表現のうち，国語史上特に議論のある助動詞「です」について，あらためて詳細に論じたものである。まず，狂言での使用実態について，大蔵流や鷺流の場合，初期の台本では，この語の使用者が，ほぼ大名に限られていたのが，後期には奏者，山伏，閻魔大王，鬼などに拡大していること，和泉流では初期の本

には「です」は見られないが，後期の『小早川本』では同時期の大蔵流・鷺流と同様の用法で，多数の用例があることが明らかにされる。そして，この用法の拡大には，「です」の持つ荒々しさ，古めかしさ，粗野な感じが関係しているのではないかと推測する。そして，狂言の「です」と，歌舞伎に用いられる「です」との関連に触れ，それらと近代以降の丁寧の助動詞「です」とが連続する可能性を示唆している。狂言や歌舞伎の「です」と近代の「です」の意味・用法がずれていることや，他の資料での徴証に乏しいことなどから，問題は依然として残るが，蓋然性のある言説としてさらに深く検討してみる必要がありそうである。

第五章は，敬意の低い命令表現として狂言で頻用される「—(さ)しめ」「—(さ)い」「—(さ)しませ」について考察する。まずこれらの語の語源や，敬意度の違い，キリシタン資料や世阿弥の能本での用例について触れ，次いで狂言での様相を詳細に検討している。用例の多い「—(さ)しめ」と「—(さ)しませ」については，大蔵流では初期の『虎明本』，後期の『虎寛本』ともに「—(さ)しめ」が圧倒的に多く使用されるが，和泉流や鷺流の本では前期，後期ともに「—(さ)しませ」が優勢であること，和泉流の場合は，後期になると「—(さ)しめ」もかなり増えてくることなどの事実が明らかにされる。また「—(さ)い」については，用例は少ないが，大蔵・和泉流では老人のことば，鷺流では無知な聟から舅の家の太郎冠者に対して使用されることばという違いが見られるという。これらの表現の各流派間の影響関係について著者は，大蔵流と鷺流は対立，大蔵流と和泉流は，後者による前者の表現の摂取という構図を見て取る。首肯すべき捉え方だと思われる。

第六章は，「飲食」に関する狂言の多様なことばに注目して，狂言の諸台本の使用実態について細かに分析している。敬意を持つことばとしては，大蔵流の『虎明本』では「参る」「上がる」「こしめす」などが用いられるが，後期の『虎寛本』では「こしめす」が姿を消し，「参る」「上がる」に加えて「召し上が（らる）る」ということばが多用されるようになっていることがまず明らかにされ，「召し上が（らる）る」の採用は，近世中期以降の国語史の流れを反映していると解釈する。また，和泉流や鷺流の台本では，閻魔王または鬼のことばとして，「服（ブク）す」という語が用いられる事実も指摘し，それは漢語の持つ堅い語感が鬼類に適すると判断されたためであろうと推測する。

三

引き続き，本書の後半の各章を見て行く。

第七章は，狂言に見られる動詞の活用の特徴について，「二段活用の一段化」と「動詞連用形の音便形」を中心に記述している。「二段活用の一段化」に関しては，著者は既に前著の第四章「狂言古本に見られる一段活用化の現象」で，初期台本の『虎明本』や『天理本』の様相を明らかにしているが，今回，『虎寛本』や『小早川本』など近世後期のものも調査して，大蔵流の場合は一貫して本文の会話部分には一段化した例がほとんど見

られず，注記（ト書き）に若干の一段化例が現れること，和泉流の場合も基本的に大蔵流と歩を一にしているが，後期の『小早川本』では初期の『天理本』に比べて一段化例がやや増え，特に注記においては百例以上の一段化例を見ることなどが明らかにされている。一方，「動詞連用形の音便形」では，『虎明本』の例を中心に，サ行・ハ行・バ行・マ行の音便形について述べるが，これまでの研究で常識的になっている点も多く，目新しい記述は少ない。サ行の音便形などは，『虎明本』以外の初期の台本を参照すれば，もう少し違った記述になっていたと思われる。全体として，本章のもととなった論文が，講座物への寄稿であるためか，他の章に比べてやや総花的な論述になっているのが惜しまれる。

第八章は，室町末期の芸能資料に現れるハ行四段動詞連用形のウ音便形と促音便形との関係について論じたものである。狂言や説経節においては一部漢文訓読的な文章に促音便形が見られる他は，原則として当時の口語であるウ音便形が用いられるのに対して，幸若舞の詞章には促音便形が多く混じる事実を明らかにした上で，幸若舞における促音便形の多用は，公家や武家を中心に愛好された文章であることと関係があると推測する。また，促音便形は連用形末尾が-ai という母音連続の場合に多く現れ，特に「随って」「向かって」という促音便形の使用が顕著であることも明らかにされる。本章は，狂言資料の内部分析という他章の記述とは趣を異にしており，むしろ狂言以外の資料の分析に重点が置かれていると言えそうであるが，様々な資料を広く見渡して，信頼すべき結論を導き出しており，著者の面目，躍如たるものがある。

第九章は，狂言台本に現れる主人や上位者の妻の呼称について詳細に考察したものである。和泉流初期の『天理本』や『古本』には，室町時代に用いられた「おうえさま」が見られるが，一般的には「かみさま」「おかみさま」が各流派，各時期に多用され，『狂言記』においては「おかっさま」という語形も見られること，そして近世中期以降は「奥様」という呼称も広く用いられるようになること，などの事実を指摘し，それらが国語史の流れと密接に関連していることを明らかにする。また，これらよりも若干敬意が下がる「お内儀」という語もあり，一般庶民の妻に対して用いられるという事実も指摘する。なお，367 頁の「妻」に関する呼称の一覧表の大蔵流の部分に，「大蔵流では『釣針』の曲がこれ（『虎明本』，評者注）以降江戸時代の台本に見られない」とあるが，これは著者の勘違いであろう。幕末の『山本東本』に「釣針」は収められており，そこでは冠者から主に対して「おごう様」という言葉を用いている。

第十章は，狂言の若い女性に対する呼称について，前章と同様の方法で考察したものである。この呼称については，各流派の主要な台本で，一般的に「おごう（様）」が用いられるが，和泉流の場合は，初期の台本から「おな」という語も用いられ，後期の『小早川本』では「おなあ（様）」が頻用されること，しかし，同じ和泉流でも三宅派の『狂言三百番集』では，大蔵・鷺流と同様「おごう」となっていること，「おな（あ）」という語は，

『狂言記』でも普通に使用されていること，などを明らかにする。「おな(あ)」は，狂言以外の文献に現れることの稀れな語のようで，著者も言うように，『狂言記』と和泉流の家元系諸本の類似は，どのように考えるべきなのか，問題が残されている。

第十一章は，狂言に出る女性の性格を象徴的に表す「わわしい」という形容詞に注目し，その成立の経緯と，狂言の各台本での使用状況について述べる。さらに，これに関連して「わわしい」と同意・類意の「かしましい」「やかましい」などのことばの用いられ方にも分析を加えている。本章では，狂言の流派，時期によってこれらのことばの選択に多様性が見られ，基本的には女性には「わわしい」，それ以外には「かしましい」が用いられるが，前期の和泉流では「わわしい」という言葉が用いられず，「(口の) はっさいな(者)」という表現であったものが，後期になると大蔵流同様女性に関しては「わわしい」のみ用いるようになること，鷺流の『保教本』など伝右衛門系の台本には，新たに「やかましい」「けたたましい」ということばも使用されるようになることなどが明らかにされている。そして，「やかましい」や「けたたましい」は，近世になって一般化したことばで，鷺流はこれを積極的に採用したものと著者は理解する。

第十二章は，鷺流『保教本』の中でしばしば注記される「忌みことば」「祝いことば」について取り上げ，婚礼の席などでは，「出づ(る)」「去る」「帰(返)る」などの言葉を避け，他のことばに言い換えるよう繰り返し注記されている事実を指摘する。時には，「無縁の聟」という曲が，祝言の席においては「吟三郎」という曲名に変えられるほどの徹底ぶりであるという。さらに，祝儀の際のことばとして，「天下泰平」「治ツタ御世」などを積極的に用いることも注記されている。これらの事実が見られる理由について著者は，本章の「まとめ」において，『保教本』には「座敷狂言」という分類名称が使用されているところから，当時「個人のめでたい座敷に招かれて演ずる機会も多くなり，それに伴って忌みことばなど細部のことばづかいへの配慮が強くもとめられるようになったのであろう」と推測する。

第十三章は，狂言の笑いをもたらすセリフの技法の一つである「秀句」について，和歌や連歌の用語との関連から説き起こして，狂言の具体的な用例の考察を行う。用例は『虎明本』からの引用に止まるが，例えば「ぬらぬら」(和泉流では「竹生嶋詣」) などの曲は，流派によって，また前期・後期の台本によって，使用される「秀句」にバラエティがあるようで，さまざまな台本での「秀句」の実態がどのようになっているのか，興味をひかれるところである。続稿に期待したい。

四

以上，章立てにしたがって，内容を見てきた。二三の疑問点や問題点も指摘したが，著者が本書で初めて明らかにした事実の多さ，重要さに比べれば，それらは瑕瑾とすら言えない程度の事柄である。

また，本書における著者の記述態度には学ぶべき点が多い。その第一は，何と言っても，著者の言わんとすることが，誰にでもよく理解でき，曖昧な言い回しや独断的と思われる表現がほとんど無いことである。第二に，狂言以外のさまざまな文献にも広く目を通して，それぞれの資料を慎重に比較しつつ論証しているので，どの章も十分な説得力を持っていることである。言語量の膨大な狂言台本の分析だけでも相当な労力を必要とするが，著者はさらに多くの労力を割いている。敬服の一言に尽きる。

さて，ここであらためて，本書の全体的な特徴を，前著『狂言台本の国語学的研究』との比較で述べると，次のようになるであろう。(一)資料として用いられた狂言台本が，『虎明本』や『天理本』といった初期のもの中心の前著から，近世全般の台本に広がり，それにしたがって記述も詳細になっていること。(二)大蔵流・和泉流の台本中心だった前著から，鷺流の台本や『狂言記』も含めた各流の台本が考察の対象となり，流派間の狂言ことばの異同がかなり明らかになってきたこと。(三)文法・表現法の考察が中心だった前著から，文末表現や語彙・語誌の考察に重点が移っていること。このうち(一)(二)については，本書の大いなる功績として讃えられるべきだと思う。特に(二)において，これまでほとんど対象とされなかった鷺流の台本（特に『保教本』）の重要性を認識させた意義は大きい。また(三)についても，特に狂言の語彙・語誌研究を大きく進展させた功績は大きいが，前著でその主要な部分を占めていた文法や敬語法の研究が少なくなっているのはやや寂しい気がする。前著の「二段活用の一段化」や「ウズ」「ウズル」，条件表現に関する論文などは，その後の研究に大きな影響を与えた論文であった。狂言台本の整備がほぼ整った現在，あらためて考えるべき文法的課題は少なくないと思う。著者のように，広い視野に立って，慎重かつ丁寧に論述できる研究者は稀れである。引き続き，狂言の文法的問題について，後学の蒙を啓く論文を公けにしていただければ有り難いと思う。なお，(二)の流派間の狂言ことばの異同，さらには同流派の家単位での異同に関して，その理由について，評者なりの意見を述べたいと思ったが，紙数が尽きてしまった。著者が所々で述べているように，これらの異同は，国語史（口語史）の影響や，一流派から他流派への影響がもたらしたものに違いないが，その様相はことばによってまちまちであり，その理由を考えるのは簡単ではなさそうである。評者自身の課題として考えて行きたいと思っている。

最後に。評者の個人的な興味から来る誤解や曲解があったかも知れない。狂言のことばに対する，評者なりの深い愛着の表れとしてご寛恕願いたいと思う。また，原稿の提出が遅延したことを，著者および編集委員の方々にお詫び申し上げる。

（1998年12月20日発行　明治書院刊　A5判　536ページ　本体価格18000円）

——熊本大学助教授——

（2001年5月19日　受理）